

# アラウンド・ザ・ワールド 2

## Around the World

第118回

### GLP-1の影響

アラウンド・ザ・ワールドPart2の118回目は、北米、英国、香港で抗肥満薬、糖尿病治療薬として承認されているGLP-1（グルカゴン様ペプチド-1）などのインクリチン薬が死亡率、罹患率に与える影響を取り上げる。（RGA再保険会社提供）

#### 1. 全人口レベルで見

て、抗肥満薬は死亡率に重大な影響を与えるが、その影響は地域によって異なり、主として、当該市場の肥満度合い、年齢、性別、薬剤の入手容易性を反映する。

#### 2. 肥満薬が国民罹患

率に与える影響は比較的小さくなる可能性が高い。

#### 3. 被保険者集団にお

ける死亡率・罹患率への影響は、国民全体に対する影響に比べて、いくらか小さくなる可能性が高い。

#### 4. 現在、保険会社の

死亡率トレンドに係るアサンプションには、医学の進歩などを要因とする改善予測が見込まれている可能性が高い。

#### 5. 抗肥満薬の影響に

関する調査結果は、現行の死亡率・罹患率に対する変化を映し出したものだ。

#### 6. 保険会社は、価格

や責任準備金のアサンプション設定や、新たな保険契約者行動予測、引受査定、支払査定等において、ビジネスに与える影響を考慮すべきだ。

#### 7. 抗肥満薬の使用は、保

険契約者の選択的な行動リスクの発生を誘引する可能性がある。なぜなら、ある個人が劇的に体重を減らした場合、その人が条件付きで加入した保険契約を解約し、より良い条件の保険契約に入り直すかもしれないからだ。このように保険会社は、死亡率・罹患率改善の経済的恩恵を必ずしも全て享受できない可能性がある。

#### 8. 抗肥満薬の使用増は、

引受査定の評価に著しい影響を与えるだろう。エビデンスが蓄積されるにつれ、引受査定は、当該療法の潜在的な影響を慎重に検証しつつ改善を認識するよう進化すべきだ。引受査定段階で正確な告知が行われたかを支払いの段階で検証する必要があるかもしれない。支払査定者は、保険申し込みの過程で行われた告知を正確に解釈するため、抗肥満薬の使用について十分に理解しなければならぬ。

#### 9. 抗肥満薬は、国民集団

の死亡率や疾患発生率を著しく改善する可能性を秘めている。被保険者集団に及ぼす影響はいくらか小さくなる可能性があるが、被保険者に係るトレンドのアサンプションを大幅に調整するのは時期尚早だと思われるが、これまで抗肥満薬が示した効果は、将来の死亡率・罹患率の改善については確信を深めるものだ。抗肥満薬の影響については急速に研究が進んでいるが、不確実な点も多いため、保険事業を適切に運営するためには事の進展を注意深くモニタリングすることが肝要だ。新たなエビデンスが出てくる、またはインクリチンやホルモン療法に係る新たな医学的所見が認められるにつれて、モデルのアサンプションは継続的に見直されるべきだ。

## 今後20年間に米国で死亡率が3.5%減少

4. 現在、保険会社の死亡率トレンドに係るアサンプションには、医学の進歩などを要因とする改善予測が見込まれている可能性が高い。抗肥満薬に起因して、当該アサ

の調査結果は、現行の死亡率・罹患率に対する変化を映し出したものだ。保険数理上のアサンプションに与える影響に置き換えるときには、保険会社・再保険会社が将来の

は、抗肥満薬が罹患率に与える影響は、通常、死亡率に与える影響より小さくなると思われる（表3）。

は、抗肥満薬が罹患率に与える影響は、通常、死亡率に与える影響より小さくなると思われる（表3）。

は、抗肥満薬が罹患率に与える影響は、通常、死亡率に与える影響より小さくなると思われる（表3）。

は、抗肥満薬が罹患率に与える影響は、通常、死亡率に与える影響より小さくなると思われる（表3）。



バタースピー氏



齋藤氏

執筆者  
RGA  
ヘッド・オブ・グローバル・リサーチ&データ・アナリティクス  
シニア・ヴァイス・プレジデント

執筆者  
RGA  
ヘッド・オブ・グローバル・リサーチ&データ・アナリティクス  
シニア・ヴァイス・プレジデント

日本語訳  
RGAリインシュアランスカンパニー日本支店 通訳

日本語監修  
RGAリインシュアランスカンパニー日本支店  
ディレクター ビジネス・デベロップメント部

日本語監修  
RGAリインシュアランスカンパニー日本支店  
ディレクター ビジネス・デベロップメント部

日本語監修  
RGAリインシュアランスカンパニー日本支店  
ディレクター ビジネス・デベロップメント部

予防薬としてのインクリチン薬の将来性にも関心が高まっている。それらの持つ全身性抗炎症作用、代謝調節機能、満腹感やインシュリン感受性への影響は、多数の慢性疾患の発症防止効果を示唆している。こうしたメリットが既往症を持たない個人にまで広がれば、国民全体において死亡率・罹患率の著しい低下が見られるかもしれない。

抗肥満薬は、国民集団の死亡率や疾患発生率を著しく改善する可能性を秘めている。被保険者集団に及ぼす影響はいくらか小さくなる可能性があるが、被保険者に係るトレンドのアサンプションを大幅に調整するのは時期尚早だと思われるが、これまで抗肥満薬が示した効果は、将来の死亡率・罹患率の改善については確信を深めるものだ。抗肥満薬の影響については急速に研究が進んでいるが、不確実な点も多いため、保険事業を適切に運営するためには事の進展を注意深くモニタリングすることが肝要だ。新たなエビデンスが出てくる、またはインクリチンやホルモン療法に係る新たな医学的所見が認められるにつれて、モデルのアサンプションは継続的に見直されるべきだ。

【バタースピー氏のプロフィール】フリストル大学（経済学・心理学専攻）卒業。ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスで理学修士号も取得（行動経済学専攻）。2018年RGAに入社。現在は、引受・支払査定、リスク管理、顧客の参画等、多様な業務分野に行動経済学を応用するための情報モデルの開発・運用を責務とするデータ・サイエンティスト、アクチュアリーチームを管轄する。